明日を語ろう！

北の農業人

KITANO NOUGYOUBITO

北海道農業に限りない愛情を注ぎ、たゆまぬ努力を続ける人々がいます。農業の未来を創造する「北の農業人」の情熱や取り組みをご紹介します。

●気候・風土に合った品目栽培で時代を乗り切る

生産者同士で連携を図りながらニーズをとらえた農業経営へ。「地域全体で支え、維持存続させること。未来に農業をつなげるのも大切な義務」

［弟子屈町］

平岡清一さん

20代で農業を引き継ぎ規模の拡大を図る

道東の内陸に位置する弟子屈町は、年間平均気温が約5℃と、冷涼な気候が特徴です。初夏は雨が多く、盛夏でも気温が低い日が続くことから、畑作には条件が厳しく、酪農業が主体の土地でした。

20年以上にわたって摩周湖農協畑作振興会の会長を務める平岡清一さんは、川湯地域で3代続く畑作農家。実はもともとは「家業を継ぐ気はなかった」と言います。「高校を出て自衛官になりましたが、20歳のときに、やはり長男の自分が継ぐべきだ、と家に戻り農業の手伝いを始めました。その頃はでん粉用の馬鈴薯生産が中心で、農地も少なく、とても儲かる仕事ではないと思っていました」

平岡さんに転機が訪れたのが、25歳のとき。父親が体調を崩したことで、農業経営を背負う立場になったのがきっかけでした。その頃から少しずつ離農した酪農地を買い、畑作用の土地を増やすことで、経営規模も拡大していきました。「同じ地域に50ヘクタールの耕作地を持つ先輩がいて、とても刺激を受けました。20代の頃に、年間売り上げ1億円という目標を掲げて、真剣に農業に取り組むようになりました」と平岡さんは振り返ります。

主力の4品目栽培でリスク分散と安定経営を

農地の規模拡大に伴い、栽培品目も増えていきました。経営を引き継ぐ以前から始めていた小麦に加えて、ビートやそば、そして加工用馬鈴薯を手がけるようになり、経営も安定していきました。

現在の農地は、借りているものも含めて90ヘクタール強。作付面積の割合は、馬鈴薯が約4割、ビートが3割弱、残りの3割強が小麦とそばで約半分ずつとなっています。近年はそば人気の高まりからそばの比率を高めている生産者もいますが、平岡さんは「なるべく偏りを減らしている」と言います。これには、気候の厳しい土地柄が影響しています。「最近は温暖になってきましたが、まだまだものづくりには苦労がある土地です。4品目をある程度まんべんなく栽培することで、リスク分散を図っています」。

生産性を向上させる努力も続けています。土の分析にも早くから取り組み、施肥設計などを工夫。酪農地帯で牛肥に恵まれていることも幸いし、ここ10年ほどは、その効果がかなり出ているそうです。また、冬期間はさまざまな分野のエキスパートを講師に招いて勉強会を開催したり、他の生産地とも情報交換をしながら、栽培環境の改善に取り組んでいます。

●川湯は寒暖の差が大きいため、馬鈴薯のデンプン量が多くなり、実入りが良くなるそうです。

●10月中旬の平岡さんの畑では、馬鈴薯の収穫が急ピッチで進められていました。現在は、でん粉用として30ha、ポテトチップスなどの加工用として6ha作付けしています。

強みは小回りのきく組織体制まちづくりとの協同も視野

弟子屈町内で畑作を営む農家は、川湯地域で6戸、屈斜路湖の南に広がる和琴地域で12戸と、どちらかといえば少数です。また、両地域では気候や環境が大きく異なり、川湯は大規模農家が中心、一方の和琴は中規模が多くなっています。栽培品目や生産者の年代の違いも大きい中で、両地域の農業を維持・存続させる体制づくりも一つの課題に。平岡さんは「農家が減らないように、地域全体で支えていくことが大切だ」と言います。

農家の戸数が少ない反面、昔からよく知る仲間同士のため、結束力が強く、意見がまとまりやすいというメリットもあります。「少人数だから小回りがきく」と平岡さんが笑うように、栽培品目の検討や次年度の農業計画なども、社会ニーズの変化に柔軟に合わせることが可能です。

現在は大豆の試験栽培中で、良い結果が出れば、新たな栽培品目に加えることになっています。「健康ブームで大豆の人気が高まっています。大量生産は難しくても、町内の豆腐店で地元の大豆を使った商品を作れば、それが名物になるはず」とまちおこしの視点も忘れません。

祖父の代からの農業を引き継ぎ、時代を生き抜く農業の確立に情熱を傾けてきた平岡さん。息子さんが「後を継ぐ」と言ってくれたそうで、「正直、うれしかった」と目を細めます。これからしばらくは息子さんとの二人三脚で、地域に根ざした農業への取り組みが続きます。

●馬鈴薯の積み込み作業中の息子さんと。「正直、自分の代で農業はやめてもいいと思っていました。息子が継いでくれることになったし、65歳までは一緒に頑張らなくちゃ（笑）」

●平岡さんは、弟子屈町が進める「えこまち推進協議会」というまちづくり活動の取り組みにも協力しています。「阿寒と知床の狭間で、観光は低迷しています。ここはすごくいいところなのに惜しい。農業と観光が連携してできることを考えています」